家族における個人の社会化研究序説

—子どもの社会化および大人の社会化研究の摸索のために—

丁　賢芽

Ⅰ．問題提起および本稿の課題

社会化という言葉は極めて多義的であって、社会化理論は社会学の中で古くから大いに議論された根本的な問題である。本稿では社会化理論を探究することが最終的な目的ではなく、むしろ社会化という問題を現代社会における一つの社会現象としてとらえ、そのあり方を追求し分析するための手掛かりを見出すことまでを目指している。

特に、現代日本社会においてみられる社会現象の中で家族とのかかわりがあるものとして次のような問題があげられる。たとえば、登校拒否や家庭内暴力といった情緒障害・少年非行やいじめなどの子どもの人格形成の問題、アパシーやモラトリアムといった青年期の問題、女性のライフサイクルの変化や大きく変化しつつある女性の生き方の問題、ストレスや単身赴任、そして機械化、産業化社会に追込まれている中・高年の男性 — 見えない父親、父親不在現象 — の問題、そして退職・高齢者の生きがい・老人の死といった老人問題などである。

そういった問題は、人間の生き方やパーソナリティの発達に深くかかわる社会化の問題としてとらえることができる。というのは、出生から死にいたる人間の一生は社会化の一つのプロセスとして扱うことができると考えられるからである。また、それらの問題は、とりわけ家族集団とのかかわりをもったライフサイクル全体の社会化の問題として把握できる。つまり、それらの問題を理解するためには、家族における個人の生涯にわたる発達過程・段階に応じた広義の社会化の研究が必要とされる。

ところが、従来の社会化の研究は、主に子どもの社会化の研究が家族と結び

つけられて多く行われてきた。特に日本での家族における社会化の研究は、子どもの社会化がそのほとんどをしめており[1]、その中でもT.パーソンズの社会化論に基づいた研究が少なくないのである。

従来、社会化研究全般においては、総じていえば、社会化＝子どもの社会化としてとらえられる傾向が強かった。それに対して最近では、社会化の問題を、個人のライフサイクル全体にわたって続く生涯発達の問題としてとらえる傾向も強くなってきつつある[2]。つまり、子ども、特に乳幼児における社会化の研究から、分析の領域が、青年、成人、老人といった各発達段階における社会化に拡大し、研究対象の範囲が広くなったと言える。社会化の研究領域は、幼児期における基礎的なパーソナリティ形成に限られるものではなくなってきた。

このように全般的な社会化研究においては、最近、生涯の各発達段階における社会化、特に大人（成人）の社会化の研究が見られる。それに対し、家族における社会化研究は、いまだに子どもの社会化だけが中心になっている。筆者は、家族における社会化研究にも新しいとらえ方が要求されると考える。つまり、家族における個人の社会化を子どもの社会化だけではなく、大人（成人）の社会化までをも含めたライフサイクル全体を通して展開されるプロセスとしてとらえることが必要であると考えられる。注目されるべきなのは、父親＝夫の、そして母親＝妻のパーソナリティ安定と社会化である。というのは、家族においては、大人（父親＝夫、母親＝妻）のパーソナリティ安定と社会化を前提として、子どもの発達や社会化が可能となると考えられるからである。

前述した事柄を研究するためには、どのような視点を用いて家族における社会化を把握するかが問題となる。本稿は、家族における個人の社会化を今後実証的に研究するために用いられる基本的分析枠組の構築および視点の設定を試みることを目的としている。本稿での考察は、これからの「家族における社会化研究」に対して、子どもだけではなく大人（親）の社会化が研究できる基礎ないしは手掛かりを提供することになるであろう。

Ⅱ．個人の社会化 ― 社会化論 ―

1）社会化概念の検討

社会化の概念は従来、大人になるまでのプロセス、すなわち子どもがその社会で適切な行動を身につけるまでの過程として考えられるのが普通であった。しかし、現在では成人後の社会化、すなわち大人になってからの社会化[3]まで問題とされる場合も見られる。その場合には従来のような、社会化とは、個人がその社会で一人前の成員となる諸資質の獲得過程であるとする概念規定では、研究対象とすべき「成人後の社会化」は適切に扱えない、という困難が生じる。

したがって、大人（成人）の社会化までをも含めた個人の社会化の問題が論じられるためには、社会化に関する従来の概念規定についての再検討が必要であり、また社会的状況に応じて概念が新しく定義づけられねばならない。なぜならば、概念枠組は、社会現象の変化にともなって、変化していくものだからである。社会化という現象をどのようにとらえるかによって、その概念定義は異なってくる。以下においては、これまでの社会化の諸概念を検討することを通して、社会化概念の整理・統合への一つの視角を摸索していきたい。その摸索によって得られる視角は、今後の社会化の問題を分析、解釈するために必要な道具となるであろう。

社会化の概念について、これまでさまざまな定義がなされてきたが、社会化論のアプローチの違いによって、その定義も異なってくる。渡辺によれば、社会化研究の流れとして次の二つのアプローチがあげられる。すなわち、T.パーソンズやR.K.マートンなどの構造機能的アプローチとR.H.ターナーらのシンボリックインタラクショニストを中心にしたパーソナリティシステム論の二つに大きく分けられる[4]。本稿で用いられる社会化の概念は、この二つのうちどちらかの立場をとるというより、両者の立場から社会化という問題を考え、家族における子どもおよび大人の社会化の把握が可能な新しい概念規定を試みてみたい。

まず、これまで用いられた社会化の概念の中でいくつかの概念を考察してみよう。社会化を子どもの予期的社会化（anticipatory socialization）、すなわち、教育あるいはしつけの過程とみなす研究者たちがいる。彼らは、社会化を「成人が未成人を社会的にパターン化し、未成人に対して将来の成人の生活

を準備する過程」(5) ［細川,1971:81］とみる。また、山村健は社会化を「一定の社会の中にあらたに誕生した子どもが、社会の成員たるにふさわしい行動様式を体得していく過程」［山村,1966:106］ と規定している。

しかし、本稿で「個人の社会化」(6) をとらえるための社会化の概念は、次の二つの点に焦点をおいて検討される。つまり、その一つは、社会化という問題を、個人のライフサイクル全体にわたって続く生涯の発達としてとらえることであり、もう一つは、社会、個人との相互作用の中で個人が主体になって働きかけ、影響を与えていく主体的側面という点である。この二つの観点について、それぞれ考察してみよう。

まず前者の観点は、D.A.ゴスリンに見られる。彼によると「社会化は、個人が社会への効果的な参加に必要なさまざまな社会的役割を演ずることを学習する、つまり、継時的な社会的序列の中の位置から位置へと移行するに応じ ― 幼児から児童へそして成人へ、学生から職業人へ、息子や娘から夫や妻へ、父や母へ ― 同時にいくつかの位置を占めるに応じて、他者の期待に一致して遂行できる知識や技能や性向をいかに獲得するか、という過程を指している」(7) ［Goslin,1969=1980:28］。彼は役割発達的視点に立って考察を行っているが、社会化をライフサイクル全体にわたって継続的に生起する過程としてとらえる点に焦点をおきたい。また、パーソンズの場合においても、『社会体系論』の中で、「社会化は生涯を通じてすすめられる」［Parsons,1951=1974:211］こと、また、「社会化は成人地位の獲得によって終わらない」［Parsons,1951=1974:243］ ということが述べられている。

そして、E.H.エリクソンの理論の中にも同様の観点を見出すことができる。もっとも、彼の理論の中では、社会化の概念についての明確な定義は見出せない。ただし、彼が展開した個人の８つのライフサイクル段階に対応した発達課題は、社会化が一生の過程であることを示している。つまり、ライフサイクルの諸段階における一連の発達課題の達成という面からの社会化、という観点が見出される。

他方、後者の観点、すなわち社会化の主体的側面は、柴野によって強調されている。彼は、これまでの社会化研究において、主体的な自己形成的側面、すなわち自ら自己を社会化する能力の獲得過程の把握が不十分であることを指摘

している［柴野,1977:19］。また、安藤の定義によると、「個人の社会化は、他者との相互作用を通して社会に適合的な行動様式を習得するという適応過程の側面だけではなく、自ら主体的に社会化していく能力を獲得し、人間らしい個性的な自我形成過程の側面も含んでいる」［安藤,1987:4］。

以上で考察したように、社会化は一生にわたる他者との相互作用を通しての人格の形成過程、ないしは社会的役割の獲得過程としてとらえられるのであって、必ずしも子どもの時期だけに重点が置かれる問題であるとは言えない。このような立場にたつならば、社会化＝子どもの予期的社会化という概念やとらえ方は修正されねばならない。

社会化の概念は、個人と社会とのダイナミックな相互作用を分析するにあたって有効な概念であるが、ここでは家族における社会化の分析のために用いられる概念として、パーソナリティの発達過程という部分に重点をおきたい。そして、本稿では社会化を、他者との相互作用を通して価値意識を内面化し社会成員の諸資質を獲得するものの、ライフサイクル全体にわたって行われる一つの自己実現の過程であると定義づけておこう。また、個人の社会化とは、研究対象や使い方によって便宜的に、「子どもの社会化と大人の社会化」、あるいは「第一次的社会化と第二次的社会化」(8) などに分けられる。

２）社会化論とアプローチ

前項において考察され定義づけられた社会化という問題を把握するためのアプローチとしては、家族社会学における発達的アプローチが適切であろう。もちろん、この発達的アプローチのみによって、個人の社会化の問題が全て分析されうるわけではない。しかしながら、本稿での目標でもある大人の社会化と子どもの社会化の把握に限定して考えるならば、それぞれの発達段階における発達課題としての社会化の把握は、発達的アプローチを通じて可能である。

発達的アプローチは、ヒルとハンセンによって用いられた、家族研究による概念的枠組（ないしアプローチ）の一つである。これは、既存のアプローチからうまくかみあう概念をとってきて、これまでの枠を越える総合的スキームを作る試みとして、比較的新しく提出されたものである［森岡,1973:10］。この発達的アプローチでつかわれる重要な概念としては、家族のライフサイクル

(family life cycle)、発達課題(development tasks)、経歴(career)などがあげられる。本稿ではそのうち家族のライフサイクル(Ⅲで考察する)と発達課題が用いられる　本稿ではまず、発達課題について検討してみよう。

発達課題の概念はR.T.ハヴィガーストにより次のように定義された。「個人の生涯にめぐるいろいろな時期に生じるもので、その課題を立派に成就すれば個人は幸福になり、その後の課題も成功するが、失敗すれば個人は不幸になり、社会で認められず、その後の課題の達成も困難になってくる」[Havighurst, 1953=1958:21]。そして発達課題の源泉は、彼によると次の三つがあげられる。それは、第一に身体的成熟、第二に文化的圧力であり、第三の源泉は、人の人格や自我をつくっている個人的価値と抱負である[Havighurst,1953=1958:23-24]。また発達課題はこれらの諸要素の相互作用から生じるものである。

次項で論じられるエリクソンの発達課題は、漸成原理(epigenetic principle)に基づく心理社会的危機(psychosocial crisis)とよばれるものである。「心理社会的」という言い方にも表れているように、発達に伴う危機は心理的要因だけではなく、社会的要因によっても規定されている。発達課題の具体的内容は、社会、文化、階層また時代により、そして厳密には各個人により異なると言えよう。

3)E.H.エリクソンの「社会化の相互性」の視点

社会化研究はこれまでにさまざまな視点から分析が進められているが、本稿では、家族における子どもおよび大人の両方の社会化が分析、解釈できる枠組構築の試みとして、エリクソンの理論から導かれる「社会化の相互性」の視点を用いる。

エリクソンの理論は、精神分析的発達理論を発達課題と結びつけたもので、人間の発達を8段階に区分し、発達の理論的基礎は「漸成原理」に基づいている。つまり、各段階の心理社会的危機の解決から生じる自我の特性および発達課題を設定している。それは、乳児期の信頼対不信、幼児期初期の自律性対恥・疑惑、遊戯期の自発性(積極性)対罪悪感、学童期の勤勉対劣等感、青年期のアイデンティティーの確立対アイデンティティーの拡散、前成年期の親密性対孤立化、成年期のジェネラティビティ(生殖性)対停滞、老年期の統合性対

絶望である［Erikson,1950=1987:317-353］。彼は、心理社会的発達は危機的段階の解決によって前進するし、「危機的」というのは転機の特質であり、前進か退行かを決定する瞬間の特質である［Erikson,1950=1987:348］と主張している。漸成的発達は互いに依存し合う諸段階の特性を表している。

エリクソンは８つの発達課題の中で成年期の段階におけるジェネラティビティという発達課題を特に強調するかたちで説明している。ジェネラティビティとは、次の世代を確立させ導くことへの興味・関心のことである。そして出産、生産性（productivity）、創造性（creativity）のような一般的な同意語の概念をも含む包括的なものである。成年期にある人々は、何ものかを「生み出す」ことを通して豊かに成熟する。この段階における「基本的徳目」[9]としては世話があげられている。

ところで、この「相互性（mutuality）」という概念は、本来エリクソンによって用いられた言葉である。彼はジェネラティビティ（generativity）概念を説明する中で、社会化過程における世代間の相互依存性ということを示した。そして彼は「相互性」という概念を「行為者どうしが、それぞれの自我の強さを発達させるために、相互に依存しあう関係」［Erikson,1964:231=1976:237］という意味で用いている。エリクソンが「相互性」という概念によって表す意味内容は、まさしく「社会化の相互性」としてとらえられるのである。

前述した「相互性」の視点について詳しくみてみよう。「社会化の相互性」という視点から、親子の関係をめぐっての社会化を考察しよう[10]。子どもは発達段階に応じて、自分のもっている要求に対しての反応（たとえば、泣くとか笑うとかいう行動）として、親の助け（あるいは反応）を求める。これに対し、親は、自分の漸成的発達段階におけるジェネラティビティという課題を行うための営みの一つとして、子どもの世話をすることがある。そして子どもと親の「相互性」が確立され、両者とも発達課題がうまく遂行されるとき、子どもと親はともに社会化されていく。つまり、親（大人）も自分の発達課題をはたすことを通して、子どもによって社会化されると言える。

このようにして、成年期と幼児期（学童期なども可能）が接し、かつ互いに協力し調整し合うという「相互性」が保たれる。要するに、子どもの社会化と大人の社会化は相互依存的である。言いかえれば、ある個人のライフサイクル

段階は、自分がかかわり合う他者の発達段階（または発達課題）とかみ合っている。つまり、人は相互補完的に「相互性」をもって生を営んでいく。他者を社会化しながら自分も社会化される存在としてとらえられる。

このようにエリクソンのライフサイクル論による社会化は、社会化される者の社会化、すなわち子どもの社会化だけではなく、子どもの社会化を担当する大人の社会化に目を向けるという視点を含んでいる。この点に関連して、片瀬の次のような説明はより示唆的である。つまり、「社会化する世代もまた、次の世代と相互作用を通じて社会化される。社会化の過程を通じて、子どもの世代も大人の世代も同時に変容される。社会化過程とは、社会化する世代と社会化される世代との緊張関係をはらんだコミュニケーションに他ならない。エリクソンは、この両者の社会化を同一過程の二側面として相即的かつ動態的にとらえようとするのである」［片瀬,1983:34］。片瀬も社会化する者の社会化に注目して「社会化の相互性」という視点の重要性を指摘している。

また、エリクソンは「相互性」について次のように述べている。「人は、本当の価値のあるものは、行為をする当事者と他者との間の相互性 ― 他人を強化しているのにもかかわらず、自身を強化するという相互性 ― を一層拡大していく、という経験を得る。このような行為の「当事者」と「他者」とは、一つの活動における相手役（パートナー）である」［Erikson,1964=1976:240］。つまり、人間の発達および発達課題を遂行する面においての個人の社会化は、個人の相手役との相互作用を通じての「相互性」の中で行われる。

この行為の「当事者」と「他者」というのを、大人（親）と子どもとして考えるならば、大人と子どもとは、一つの活動としてみなされる「社会化」において、互いに相手役となる。つまり、大人にとっては子どもが相手役となり、子どもにとっては親が自分の相手役となって、両方の社会化が行われる。そうすることによって、個人は、他者を強化しているのにもかかわらず、自分をも強化するという、いわば「社会化の相互性」の中に置かれると理解される。

ところで、家族内における個人の社会化に関して、見落としてならないのは、端的に言って次のことである。すなわち、大人（親）の社会化がうまく行われてはじめて、子どもの社会化もうまく遂行できる、ということである。なぜなら、ある個人の社会化はその人とかかわり合う他者の社会化とかみ合っている

— 相互依存的である — からである。ここでの「社会化の相互性」とは、大人（親）が子どもを社会化しながら、大人（親）もジェネラティビティと子どもの世話という自分の発達課題を果たすことを通して、自ら子どもによって社会化されていくことをあらわしているのである。

Ⅲ．家族と社会化

個人の社会化が行われる場あるいは社会化のエイジェントとしては、家族、親族、遊び仲間、近隣（地域社会）、学校、マスコミ、活動クラブ、職場集団などの諸種の社会集団が取り上げられる。その中でも家族が、個人の社会化の重要なエイジェントとして、大きな意味をもつのは言うまでもない。

ところが、現代の家族は、家族の急激な変化、人々の価値観や意識あるいは生活様式の変化や多様化を反映して、様々な変化とともに多様化している。そのような特徴をもつ現代家族が、様々な社会変化の影響をうけている個人に対して、社会化のエイジェントとしての機能を果たすことができるのか、といういわば家族の社会化機能が、家族の機能の中で大きく問題になっている。それゆえ、現代の社会現象の一つの特徴としての社会化を、家族内における社会化の問題として探究することは、意味深いものがあろう。　したがって、本章では、個人の社会化において家族が与える影響あるいは家族がもつ意味など、家族と社会化とを結び付けて考察してみる。

１）社会化の場としての家族

家族は、一つの社会集団として、人間社会に最も普遍的で、かつ基礎的な集団である。家族についての定義は、研究によって様々でありまた複雑であるが、森岡においては「家族とは、夫婦関係を基礎として、親子、きょうだいなど小人数の近親者を主要な構成員とする、第一次的な福祉追求の集団である」［森岡,1978=16］と規定されている。個人は普通、生まれたときから死ぬときまで、何らかの形で、家族という集団に属して生活する。つまり、定位家族（family of orientation）の中に生まれ育ち、生殖家族（family of procreation）を

形成して子どもを生み養育するのである。

先に述べたように、社会化は幼児期における基礎的なパーソナリティ構造の形成だけに限られるものではない。青年期と成人期まで続くものとしてそれぞれの時期に特有のパーソナリティの形成と発達・変容もまた、重要視されねばならない。家族は「人間のパーソナリティをつくりだす工場」［Parsons,1956=1986:35］であり、「相互作用する諸パーソナリティの統一体」(11)であるので、子どもだけではなく大人にとっても、家族はそのパーソナリティ形成と安定に重要な部分を占めていると言える。

社会化は人間の全生涯の発達過程を通じて見出される過程である。全生涯の中でも子どもの時期の社会化が特に重視されているのは、子どもの時期の社会化が、成人期のそれに対して原初的ともいうべき規制力をもち、基本的なパーソナリティを形成することとして考えられているからである。そして、子どもの時期の社会化は、第一に家族という場においてなされる。しかしながら大人の場合にも家族においてパーソナリティの安定化を獲得するとともに、親であるということが、子どもの社会化にとって重要なだけでなく、親たち自身の自分の情動のバランスを持つことにとっても重要性を有する。したがって、家族は子どもだけでなく大人（親）の社会化が行われる場として、少なからぬ意味をもつのである。

ところで、エリクソンは、乳児と家族に関して次のように論じている。「乳児は、家族の外的・内的生活を、つねに一貫して支配する。家族全員が乳児を統制し、育てるという言い方が正しいのと同じく、逆に乳児が家族全員を統制し、育てるという言い方も、また正しいのである。　つまり、家族というものは、乳児に育てられることによってのみ、乳児を育てることができるのだ」［Erikson,1968=1973:119］。簡単に言えば、親などの家族成員は、子どもによって育てられながら、子どもを育てていると理解される。要するに、親は子どもを社会化することによって、初めて親になり、より成熟した親として社会化されるのである。

先の引用のなかの、乳児が家族全員を統制し、育てるという部分と結びつけて、子どもがいることによって親の側で展開していく変化について述べてみよう。親は子どもをもつことにより病院、保育園、あるいは幼稚園、塾、学校な

どの家族集団以外の社会組織とかかわりをもつようになり、子どもを通じての友人関係（たとえば子どもの親どうしとしての）をつくりあげていく。子どもの成長過程段階、子どもの数、性別、出生順位などによって親が子どもを通して接する集団は異なってくる。つまり、子どもが生まれたことによって子どもを媒介とする、社会的ネットワークが形成される。このような、子どもがいることによって親が獲得し、変化させていく様々な役割や他者との相互作用は、大人の社会化の一側面としてとらえることができる。

現代の家族はその形態において核家族化の傾向、特に小核家族化の傾向をたどっているが、その影響は子どもの社会化の問題として現れると同時に、親自身の社会化の問題として現れる。また、現代家族を特徴づける点として、「親子の断絶」「世代の断絶」が叫ばれ「母性喪失」「父親なき社会」などが語られている。これらの点はまさしく家族の問題でもあり、個人の社会化とも直接かかわる問題である。このような場合においても、子どもの社会化への影響だけが問題ではなく、親自身の大人への社会化も重要視されねばならない。

人間が社会生活において一生帰属し社会化を遂行していく集団は、家族にほかならない。個人が定位家族と生殖家族を過ごすことにより、家族は一生の間個人の社会化の場としてあるいはエイジェントとして、他の諸社会集団に対してその基礎的重要性を保っていると言えよう。

２）家族関係と個人の社会化

家族における社会化は、家族成員間の多様な相互作用によって、すなわち夫婦、親子およびきょうだいなどという人間関係を通して展開される。そして家族関係とは、家族内部の人間関係、家族員の相互作用をさし、家族における個人の社会化の場として考えられる。たとえば、子どもは親との相互作用を通じて社会化されるけれども、親子関係は子どもだけが社会化される場ではない。親子関係はまた、親が社会化される場 ― 親は子どもを社会化することによって、自らもジェネラティビティの発達課題を達成する ― でもある。

マードックは、核家族には次の８つの関係が集まっていると説明している。すなわち、夫と妻、父と息子、父と娘、母と息子、母と娘、兄弟と兄弟、姉妹と姉妹、兄弟と姉妹が、それである。そして相互に作用し合うペアー成員は、

直接的には、お互いに補強し合う行動を通して、また間接的には、各人が他の家族成員と個別にもつ諸関係をとおして、結ばれている［Murdock,1949=1986:26］。また、拡大家族の場合なら、核家族の８つの関係の他、さらに舅と嫁、姑と嫁、祖父と孫、祖母と孫などの関係が追加されよう。家族員数が増えることによって、家族関係もその増加以上に複雑になってくる。家族員数（子ども数）が多くなると、それが組みあわさって複雑な相互作用のパターンができ、それが家族成員の社会化に影響を及ぼす。

本稿では、核家族における家族関係を中心に、家族関係を３つに分け、その３つのそれぞれと社会化とを結び付けて考察する。その３つは夫婦関係、親子関係そしてきょうだい関係であるが、ここでは親子関係を中心に個人の社会化の問題を考える。

まず、家族の基礎となる夫婦関係と社会化について考察しよう。従来、夫婦関係によって及ぼされる子どもの社会化への影響などの研究が行われてきた。たとえば、夫婦の勢力関係の類型と子どもの社会化や子どものパーソナリティとの関連についての研究がある[12]。そして夫婦関係と大人の社会化においては、それを扱った研究はほとんど見あたらないが、結婚生活への適応など夫婦どうしの妻、夫としての社会化と、子が生まれてからの養育などをめぐる夫婦間の意思決定問題などが大人の社会化として考えられる。

次に、親子関係と社会化について検討しよう。親子関係は、個人の社会化にとって不可欠かつ基底的な意義を有している。　親子関係のあり方は、父親と子、母親と子によって、また子どもの性別や人数、家族のライフサイクル段階によってその様態が異なってくる。前章で述べたように、親子関係からする社会化は、単に子どもが親のしつけや態度によって社会的パーソナリティを発達していくというだけでなく、親子間の相互作用の中で親自身もまた子どもの発達や変化を通じてより成熟していく過程でもある。

社会化の主要な局面が、親による、乳幼児期の子どものパーソナリティ形成の過程（基礎的な社会化）であることは否定できないが、親子関係を扱った研究の多くが、親から子どもへの一方的なダイナミックスとしてとらえられている。特にしつけの研究が中心であった。親子関係は親と子どもの両方の相互作用により成り立つので、親から子どもへの作用とともに、子どもから親への作

用を重視する研究も見られる[13]。しかし、そこから子どもの社会化に対しての親（大人）の社会化を見出すことには着目していない。

親子をめぐる現代家族の特質、すなわち「見えない父親、父親不在、または父権喪失」などは父子関係（と社会化）をあらわす特徴であり、また「母子一体化、過保護、教育ママ、母性の喪失」などで特徴づけられるのは、母子関係における社会化の問題を示唆している。親子関係において父親と母親の子どもに対しての働きかけや役割が異なっている。父親が子どもにとって権威の原体験、最初の男性モデルであるとするならば、母親は、愛の原体験、最初の女性モデルである。このような父、母親の役割ないしは養育態度などと関連づけ、父、母親を類型化して子どもの社会化を分析した研究が見られる[14]。本稿の視点、「社会化の相互性」の見地から、子どもから親への作用、影響を大人（親）の社会化として把握できる、親子関係を通じての両方の社会化研究が工夫されねばならない。それは今後の実証的な研究課題にもなる。

３つ目のきょうだい関係と社会化を考えてみる。きょうだいを持つことは、同じ自分の仲間を持つ最初の経験である。きょうだい関係における社会化の問題は、きょうだい構成の側面から論じられる。きょうだい関係の基礎となる形態的特性としては、きょうだい間の出生順位、きょうだいの大きさ、性構成、年齢間隔などがある［指田,1979:95］。これらの要因によってきょうだい関係における社会化は影響を受ける。また、きょうだい関係における社会化は子どもおよび大人の相互的な社会化に関連づけられるものとして考えられる。きょうだい関係そのものが、子どもどうしの相互作用を通して互いにパーソナリティないし行動の発達に大きな影響を及ぼす。きょうだい関係は、家族の中で競争や連帯などのヨコの人間関係に基づく社会化が行われる場である。しかし、きょうだい数が少なくなった現代家族の場合、ヨコの関係から社会化（子どもの社会化）を受ける機会が少なくなったことによって、連帯意識や、競争心などが弱くなってきているという見方もある。

３）家族のライフサイクルと個人の社会化

個人の出生・成長・成熟・老衰・死亡という一生の過程は、家族生活の成立から消滅までの過程と相関して進行するといえる。つまり、核家族には、各社

会集団のように始めと終わりがあり、発達過程がある。生活の一種のくり返し現象であるこの家族の発達過程ないしは生活歴を家族のライフサイクルと呼ぶ［西村,1988:44-45］。

また、家族の発達課題は、家族のライフサイクルのある段階において、家族がその成員の欲求を満たし、単位としての家族のたえざる成長と発達のための種々の要件を満足させる際に発生してくる［Duvall,1962=1971:118］。ライフサイクルの段階によって個人の発達課題が変化するように、家族の発達課題も家族周期の各段階に応じて変化するということは言うまでもない。家族の発達課題は、それぞれの家族によって、家族成員の個々の発達課題および家族をとりまく社会的規範によって異なってくる。

家族の成立から消滅までの核家族の一生の過程を区切る、家族のライフサイクルの段階区分法は、何人かの学者によって様々に試みられた。またその段階設定と関連づけられた研究も数多くなされてきた。それらの研究を大まかに分けてみるならば、家族構成を中心に、経済活動の周期的浮沈および社会活動の段階的特色などに注目する立場からの研究である。しかし、家族生活における個人の社会化に焦点をあわせた家族のライフサイクル論を扱った研究はあまり見あたらない。

従来の研究における家族のライフサイクルの段階設定を検討してみよう。つまりJ.H.S.ボサードとE.S.ボル、またR.O.ブラッドによる６段階の区分、E.M.デュボールらの８段階、ヒルによる９段階、森岡清美の８段階説などがある[15]。これらの段階区分は、子どものない時代と子どもの独立後の老夫婦だけの時代をそれぞれ一つの段階と見ることには意見の一致が見られる。しかしその中間をどのように区切るかについては、研究者によってまた研究内容によって相違が見られる。上記のいくつかの段階区分法を参考にしこれからの実証研究に用いられる段階設定を試みてみる。

本稿では、家族のライフサイクルの各段階を個人の社会化の場として考え、個人の生涯の社会化の過程を、家族のライフサイクルと関連づけるにあたって次のような６つの段階に区分してみたい。この段階の区分設定は、家族における子どもおよび大人の社会化を家族のライフサイクルを通じて把握するための一つの手掛かりとして試みられるものである。

それは、Ⅰ．子どものない段階（新婚期）Ⅱ．第一子の出生から小学校入学まで（育児期）Ⅲ．第一子の小学校卒業まで（学齢期）Ⅳ．第一子中学校から高校卒業まで（思春期の子をもつ時期）Ⅴ．第一子高校卒業から結婚の前まで（青年の子をもつ時期）Ⅵ．子どもの離家族の老夫婦（向老期）の六つの区分法である。その段階設定の基準は、子どもの出生と離家、特に第一子の成長段階であるが、家族のライフサイクル段階と社会化を組み合わせた実証研究のため、便宜的に区分したものにすぎない。

これらの家族のライフサイクル段階ごとに、「社会化の相互性」の視点から社会化を分析した場合、子どもおよび大人（親）の社会化にどのような特徴が各段階で現れるかなどを、今後の実証研究を通して取り組んでいきたい。個人の社会化にかかわる家族変数については、本稿でふれることができなかったことを断っておきたい。

Ⅳ．結びに

本稿では、家族における社会化の問題を、個人のライフサイクル全体にわたる生涯過程の社会現象として把握し、子どもおよび大人の社会化をともに考察することを目指した。そのため、エリクソンの理論から導かれる「社会化の相互性」という視点が用いられるべきであるということを提案した。しかしながら、この「社会化の相互性」の視点というとらえ方は、家族における社会化問題が把握できる分析枠組というより、大人の社会化分析への一つの試みにすぎないということを断っておきたい。

本稿の考察を通じて得られた家族における社会化研究のための提案あるいは今後に残された課題は、次のいくつかの点にまとめられる。

まず、第一は、エリクソンのライフサイクル論に基づく社会化論の研究が社会学的な観点から行わねばならないということである。というのは、エリクソンにおいては、社会化する者（世代、大人、親）の社会化が強調されているので、そのライフサイクル段階ごとに行われる家族における社会化の問題は、大人と子どもの「社会化の相互性」という視点から把握可能であるが、それを分

析するための枠組が社会学的立場から工夫されねばならない。つまりエリクソンの理論そのものとしては、社会化の問題を分析することが難しいからである。

第二は、社会化の問題を個人のライフサイクル全体に続く過程としてとらえる場合、社会化の概念だけではうまく分析できないと思われるものがあるので、パーソナリティ、自己実現などを社会化概念の通概念としてつかう必要があると考えられる。

第三は、本稿の課題を研究する際、ひとり親家族ないしは共働き家族における子どもおよび大人の社会化を「社会化の相互性」の視点から取り組んでいくことは、今後の課題として興味深いものがあると考えられる。また、現代の高齢化社会において生じる様々な老人問題を、家族における社会化 ― 老人の再社会化という言い方もあるが ― の問題として今後の考察を進めることができると思われる。

本稿では、家族における個人の社会化について今後の実証研究にあたっての考察を行ったが、社会化の諸側面（内容あるいは主題）についての検討などは今後に残されている。

<注>

（１）日本において家族における社会化研究の中で、子どもの社会化を扱っているいくつかの研究には次のような研究がある。例えば、１）山村賢明 1964 「親子関係と子どもの社会化 ― 文化の観点から ― 」、『教育社会学研究』19集、日本教育社会学会、２）佐藤カツコ 1970 「家族における子どもの社会化に関する一考察 ― ベールズ相互作用分析による親子関係の分析 ― 」、『教育社会学研究』25集、３）佐藤カツコ 1976 「親子関係と子どもの社会化」、『教育社会学研究』第31集、４）野々山久也 1976 「現代家族と子どもの社会化」、『桃山学院大学社会学論集』第10巻、第１号、５）倉重和枝 1981 「海外赴任と子どもの社会化」、『家族研究年報』No.7、家族問題研究会、などである。

（２）例えば次のような研究がある。１）青井和夫 1976 「社会化再考」、『教育社会学研究』31集、日本教育社会学会、２）柴野昌山 1976 「青年期の教育と社会化」、『教育社会学研究』31集、３）片瀬一男 1983 「E.H.エリクソンにおける二次的社会化への視点 ― ライフサイクル論の意義をめぐって ― 」、『社会学評論』第34巻、３号、 135号、４）萩原元昭 1971 「成人期社会化序説」、『群馬大学教育部紀要人文・社会学編』第21巻、５）渡辺秀樹 1980 「社会化とライフサイクル」、青井和夫他編、『家族と地域の社会学』、東京大学出版会。

（３）再社会化（re-socialization）や成人期社会化（adult-socialization）

そして老人期への社会化（socialization to old age）などがあげられる。

（４）前者の社会体系の観点からすれば、社会化は役割遂行さらに社会体系の維持・発展を可能にするために、そのメンバーである諸個人が価値・規範・知識・信念・技術といった諸資質を学習するメカニズムである。後者のパーソナリティシステムの観点からすれば、社会化は個人が社会生活へ効果的に参加するために、知識や技術や価値などを学習するプロセスとして定義される［渡辺,1980:26］。

（５）細川によると、この立場にたつ人々にE.デュルケム（1922, Education et sociologie）、I.L.チャイルド（1954,Socialization）、作田啓一（1964,『人間形成の社会学』）、菊池幸子（1968,『家族関係の社会学 ― 教育篇 ― 』）などが取り上げられている。

（６）普通社会化といえば、ほとんど「個人の社会化」を意味するが、「集団あるいは社会の社会化」「文化の社会化」という概念も使われているからである。

（７）訳は、渡辺の前掲書P.28より引用される。

（８）P.L.バーガーはそれを次のように定義している。「第一次的社会化とは、個人が幼年期に経験する最初の社会化のことであり、それを経験することによって、彼は社会の一成員となる。これに対し、二次的社会化とは、すでに社会化されている個人を彼が属する社会という客観的世界の新しい諸部門へと導入していく、それ以後のすべての社会化のことをいう」［Beger, 1966=1977;221］。

（９）基本的徳目（virtue）とは、それぞれの心理的危機を克服するごとに獲得される自我の資質を意味している。このvirtueという用語は、ラテン語で、力強さ、生殖力を意味する。これは、少なくともここで示したいと思っている強さ、統制力、勇気といったものの統合された性質を示している［Erikson, 1964=1976:107］。

（10）エリクソンは、「成人と赤ん坊の相互性」について次のように説明している。「乳児のはじめての種々な反応は、親との間の相互の刺激と反応の細かい組み合わせでできているとみることができる。乳児の最初の笑いは　顔の上にあらわれる単なる筋肉の運動のかたちにすぎないのだが、これを見ると成人は微笑をかえさざるを得ない気持ちをかきたてられ、子どもに「わかってもらった」という期待が満たされる。そしてこれによって安定を得る。この安定を成人から示されることはまた同時に、乳児の要求でもある。要するに成人と赤ん坊の相互性が、望みの根源であり、倫理的行為も含めて、すべての効果的な行動の根本的成因をなしている。子どもを世話している親は、子どもの活動性、同一性の感覚、倫理的行為の準備性を確保していくために　いろいろなことをやりながら、それをやることによって、自分自身の活動性、同一性感、倫理的行為の準備性を確保しているのである」（傍線引用者）［Erikson, 1964=1976:237-238］。

（11）Burgess,E.W.,1926 The Family, 訳の引用は森岡清美「家族関係の科学」、森岡清美　1973　『新家族関係学』、P.10による。

（12）次のような研究が取りあげられる。１）Straus,M.A.,1962 “Conjugal Power Structure and Adolescent Personality”, Marriage and the Family Living, 24:1 、２）本村汎・斧出節子　1987　「夫婦の勢力関

係と子どものパーソナリティ」、『大阪市立大学生活科学部紀要』第35巻、3）本村汎　1969　「家族における幼児の社会化の研究 ― 両親のパーソナリティ特性と夫婦関係との関係において ― 」、『大阪市立大学家政学部紀要』第17巻、4）本村汎　1970　「夫婦関係と幼児の社会化 ― 情緒障害児の臨床的研究をふまえて ― 」、『社会学評論』82号、などの研究がある。

(13) このような研究として取りあげられるのは、1）桑畑勇吉　1970「"Socialzation"について」、『大阪市立大学家政学部紀要　社会福祉学部』、第18巻、2）山村健他　1968　「中学・高校生の家庭生活 ― 親子間の相互作用分析 ― 」、大正大学社会学研究室、東京都、3）佐藤カツコ　1970　「家族における子どもの社会化に関する一考察 ― ベールズの相互作用分析による親子関係の分析 ― 」、『教育社会学研究』第25集、などである。

(14) すなわち、1）葉柳正　1968　「母親の養育態度と子どもの人格形成 ―― 幼児の社会化における臨床的側面 ― 」、『教育社会学研究』第23集、2）桑畑勇吉　1971　「父親の役割と子ども社会化」、『社会福祉論集』（大阪市立大学）15-16 、3）杉岡直人　1984「父親関係と子どもの社会化」、『北星論集』第21集、北星学園大学、などがある。

(15) a)Bossard,J.H.S. and Ball,E.S.　1950　"Family Ritual and the Family Cycle", Ritual and Family Living :ch.7　b)Blood,R.O.1960 Husbands and Wives:The Dynamics of Married Living, Free Press, c)Duvall,E.M.　1962　Famly Development, Lippincot　d)Hill,R.1965 "Decision Making and the Family Life Cycle", in Shanas and Streib(eds.), Social Structure and the Family : Generational Relation, Prentice-Hall　e)森岡清美　1973　『家族周期論』、培風館、などがそれである。

＜文献＞

安藤　喜久夫（他編）　1987　『生活の社会学』、学文社。

Berger,P.L. and Thomas Luckman　1966　The Social Construction of Reality, New York.=1986（初訳は1977）山口節郎訳、『日常世界の構成 ― アイデンティティと社会の弁証法 ― 』、新曜社。

Duvall,E.M.　1962　Family Development, Lippincot.=1971　山根常男訳（編）『家族の社会学理論』、誠信書房。

Erikson, Erik H.　1964　Insight and Responsibility, W.W.Norton.=1976 鑪幹八郎訳、『洞察と責任』、誠信書房。

_____.　1968　Identity－Youth and Crisis, W.W.Norton.=1977 岩瀬庸理訳、『アイデンティティ ― 青年と危機』、金沢文庫。

_____. 1950 Childhood and Society, W.W.Norton.=1977 仁科弥生訳、『幼児期と社会１』、みすず書房。

Goslin,D.A.ed., 1969 Handbook of Socialization Therory and Research, Rand McNally.

Havighurst,R.T. 1953 Human Development and Education, Longmans, Green & Co.=1958 荘司雅子訳、『人間の発達と教育 ― 幼年期より老年期まで ― 』、牧書店。

細川 幹夫 1971 「社会化（Socialization）の諸概念」、『麗沢大学紀要』11:72-88 。

片瀬 一男 1983 「E.H.エリクソンにおける二次的社会化への視点 ― ライフサイクル論の意義をめぐって ― 」、『社会化評論』、34-3(135): 254-269。

森岡 清美 1973 『家族周期論』、培風館。

_____ 1979 『新家族関係学』（初版1973）、中教出版。

Murdok,G.P. 1949 Social Structure, Macmillan Com.=1986 内藤莞爾監訳『社会構造 ― 核家族の社会人類学 ― 』、新泉社。

西村 洋子 1988 「家族 ― 第一次集団における社会化 ― 」、関口礼子（編）『揺らぐ社会の人間形成』:1-58、勁草書房。

Parsons,T. 1951 The Social System, Routedge & Kegan Paul.=1974 佐藤勉訳、『社会体系論』、青木書店。

柴野 昌山 1977 「社会化論の再検討 ― 主体性形成過程の考察 ― 」、『社会学評論』、28-3(107):19-34。

渡辺 秀樹 1980 「社会化とライフサイクル」、青井和夫（他編）『家族と地域の社会学』:25-50、東京大学出版会。

山村 健 1966 「ソーシャライゼイション」、『教育社会学研究』 21:105-117、日本教育社会学会。

指田 隆一 1979「きょうだい関係の研究 ― 社会化を中心にて ― 」、『上智大学社会学編集』 3:92-111。

（ちょん ひょな／筑波大学大学院）